

湘南医療大学 ティーチング・ポートフォリオ

湘南医療大学
保健医療学部リハビリテーション学科
理学療法学専攻
土田将之
作成日 2026年4月22日

1. 教育の責任

私は湘南医療大学保健医療学部リハビリテーション学科(理学療法学専攻定員60名、作業療法学専攻定員40名)の教員として、以下の科目を担当している。

科目名	必修・選択	学年	前期・後期	対象学科・専攻	単位
理学療法教養基礎	必修	1	前期	理学	2
物理療法学	必修	2	後期	理学	1
物理療法学演習	必修	3	前期	理学	1
解剖学実習	必修	2	通年	理学・作業	2
理学療法研究法演習	必修	3	後期	理学	1
チーム医療論	必修	4	後期	看護・理学・作業	1
理学療法卒業研究	必修	4	通年	理学	4
クリニカルリーズニング論	必修	3	後期	理学	1
理学療法特論Ⅰ	必修	3	後期	理学	1
見学実習(理学療法)	必修	1	前期	理学	1
評価学実習	必修	3	後期	理学	4
地域リハビリテーション実習(理学療法)	必修	3	後期	理学	1
総合臨床実習Ⅰ	必修	4	前期	理学	7
総合臨床実習Ⅱ	必修	4	前期	理学	7

表で示す通り、担当科目は全学科全学年に渡っており、その範囲も基礎医学分野から理学療法の専門分野、多職種連携関連分野にいたるまで幅広い。また、1年生と4年生のチューターの一人として、担当学生の学習支援を行っている。他にも4年生に対しては、国家試験対策委員として国家試験勉強に携わり、個別の学習指導や学習進捗度の管理などを行っている。理学療法士は年々活躍の場が広がっている医療職であり、医療保険分野や介護保険分野だけでなく、地域の予防事業や、最近では学校保健にまでニーズが拡大している。どのような領域で活躍するにしても、医療人としての足腰の強さは基礎医学によって作られると私は考えている。そのため基礎医学の知識に基づいた理学療法臨床思考の展開を心がけた教育を行っている。

2. 私の理念・目的

1) 私の理念

私の理念は、学生が自主的に学び、成長するための環境を提供することである。学生が自ら学ぶ力を育てるためには、以下の3つの要素が重要と考えている。

①学生が自ら学ぶ力を育てる

学生が自主的に問題を解決し、知識やスキルを獲得するための機会を提供する。講義や実習での活動を通じて、学生が自分自身で考え、行動する力を涵養する。

②学生に学びを促すだけでなく、自らが学び続ける姿勢を学生に示す

私たち教員は、学生に対して常に学び続ける姿勢を示すことが重要である。自分自身も知識やスキルを向上させるための研究活動、教育活動を怠ることなく、学生の良い手本として在り続ける。

③常に謙虚に、「我以外皆我師」の気持ちを持つ

私たちは教員として高い専門知識や経験を持つと自負すると同時に、常に誰にでも、謙虚な姿勢で接することが大切である。「学生からも学ぶことがあり、相手の意見や経験に敬意を払う」という姿勢を学生に示すことで、より良い教育環境を作り出せると考える。

以上の3つの要素を組み合わせることで、私は学生が自ら成長し、理学療法の実践家として活躍できるようサポートする。

2) 理念をもつに至った背景

医療系養成校で学ぶべき知識・技術は膨大なものである。にもかかわらず、講義の時間は限られているため、どうしても「詰め込み型教育」に傾きがちである。もちろん人の命に関わる職業を目指すものとして、絶対に覚えなければいけない多くの知識・技術があり、詰め込みはそれらを効率よく習得するための有効な一手段ではある。しかし、他者(多くの場合は教員)から半ば強制的に押し込まれた知識・技術が、果たして本当に役に立つものとして定着するだろうか、疑問である。

私は「心が動いてこそ、はじめて頭が動く」と考えている。膨大な情報があふれる現代社会において、興味関心の向かない情報を覚える余地はほとんどないであろう。だから重要な知識・技術こそ学生の興味や関心が向くような仕組みづくりが重要であると考え。また医学知識、医療技術の日進月歩の発展に寄与し、常に自分自身をアップデートさせていくためには、4年間の大学生活を通して自ら学び続ける姿勢を養うことが必須であると考え。

そして学生が学ぶ姿勢を身につけるためには、手本となるような「学び続ける人」がすぐ近くにいることが必要で、その役割は大学の教員が担うべきである。我々教員自身が常に謙虚に学び続け、「新しいなにか」を発見する気概を学生に見せ続けることが、学生の学びに対する好奇心を惹起する一番の力になると考えている。

3. 教育の方法・戦略

学生の主体的な学びを実現するために、アクティブラーニングを積極的に導入する。その目的は以下の通りである。

①学生の主体性を高める

従来の講義形式では教員が中心となって授業を進めるため、学生は受動的な姿勢で授業

を受けることが多いが、アクティブラーニングでは学生自身が問題解決やディスカッションなどの活動を通じて学ぶため、自己学習能力を向上させることができる。

②実践的なスキルを身につける

グループワークやディスカッションなどの活動を通じて、実践的なスキルを身につける。例えば、理学療法士に必要なコミュニケーション能力や臨床推論的思考力などについては、講義形式のみでは習得が困難だと考える。

③協調性やコミュニケーション能力を向上させる

グループワークやディスカッションなどの活動を通じて、協調性やコミュニケーション能力を向上させることができると考える。例えば、グループワークでは、他のメンバーと協力して課題を解決する過程を通じて、論理的に説明する能力、協調性、コミュニケーション能力を向上させることが狙いである。

このような能動的な学びについて、以下のような具体的な取組みを通じて実現を目指している。

①骨標本ペーパークラフトの制作(解剖学実習)

理学療法学専攻(定員40名)、作業療法学専攻(定員40名)、合計80名を4人1組の20班に分ける。このとき、学びの多様性を確保するために、班構成は理学療法学専攻と作業療法学専攻が半々になるようにする。

班員はグループワークとして、共同で人体骨格模型「ボーニー」を制作する。ボーニーは身長約 160cmの等身大の人体骨格が再現できるペーパークラフトである。制作を通して骨のランドマークの特徴、関節の構造などを体験的に学習する。

②骨標本への筋肉の貼付(解剖学実習)

制作したボーニーの表面に、筋を模した毛糸を貼付する。作業を通して筋の起始と 停止の位置、深層筋と浅層筋の位置関係を体験的に学習し、班員の共同作業を通してお互いに教えあいながら理解を深める関係づくりを促す。

③完成した骨標本を用いての、筋肉の起始停止の口頭発表会(解剖学実習)

筋の貼付が完成した骨標本を用いて、筋肉の起始・停止・作用・支配神経を口頭で発表する。発表はポスターツアー形式を採用し、各班必ず一人一回は発表役を担う。聴講者は発表者に対し、発表内容についての成績評価とポジティブなフィードバックを与えることで、学生同士で自主的に学び合う環境を醸成する。

4. 学習成果

発表会の実施後に、「一連の骨標本実習を通して新たに発見したこと、学んだこと」というテーマでレポート課題を課した。その回答例は以下の通りであった。

○今までは筋肉の起始・停止・作用などを文字で覚えているだけだったが、筋の立体的な構造や深層・浅層の関係性など、自分たちで考えながら制作をすすめることで、初めて身体構

造を立体的に知ることができた。

○停止が同じ部位の筋でも、起始が少しずれているだけで作用がまったく異なってしまう筋もあることが分かった。

発表会後に実施した筆記試験においても、重要筋の起始・停止・作用・支配神経について多くの学生が著しい理解の向上を示していた。学生たちが主体的に学び、教え合う環境の情勢を進めたことが、学習の理解に繋がったと考えている。

5. 改善のための努力

①学習への動機付け

解剖学などの基礎医学の理解は、医療系学生にとって必須ではあるものの、患者をみたことのない学生にとっては「机上の学問」になりやすい。できるだけ理学療法士、作業療法士が実際の臨床現場で抱える問題と関連付けることで、基礎医学への興味関心を高める講義を心がける。

②受動的授業態度からの脱却

講義形式の中に、学生同士で話し合う時間、教え合う時間、話し合ったことを発表する時間を設けることで、教員から学生への一方向の講義から、教員と学生が双方向型の能動的講義への転換を促す。

6. 今後の目標

①短期目標

理学療法士の養成校に通う学生にとって、最終的な目標は国家試験の合格である。年々拡大を見せる出題範囲に対応し、合格点を勝ち取るレベルの知識・技術を習得するためには、能動的かつ継続的に学ぶ習慣の形成が必須である。学ぶことの意義を学生と教員が共有しつつけることで、自ら学ぶ習慣づくりの支援を行っていく。

②長期目標

理学療法士は生涯勉強である。免許を取得してからも現状に満足せず、常に研鑽を続けるべき職業である。他者からの強制ではなく、自らの強い意志で学びを続けるためには、大学4年間での勉強習慣の形成が必須である。心と体を動かしながら頭を動かす働きかけと、学生同士が教え合い、学び合う環境の醸成により、卒業後も探究心をもって進み続ける理学療法士を育てたい。

【添付資料】

なし